

無学求道作成「自分が変わるために」より
虚雲和尚伝—120才の生涯（草書房）を参考にして。

中国で発展した大乘禅ではあるが、時代とともに本道から外れた流派も生んだようです。原因は六祖慧能の弟子荷沢神会（かたくじんね）（684～758）の坐禅関係者として、あるまじき策動だったようです。（ネット情報）ここに記して皆様の注意を喚起したいと考えました。

P160より始まる「参禅の方法」から

P164 （念仏している人に）「念仏しているのは誰か」と問いかける。この問いで最も重要なのは「誰か」である。その他の単語は文章に意味を与えているだけである。「衣を着て食事をしているのは誰か、「便所で用を足しているのは誰か、「無明を終わらせようとしているのは誰か」、「ものを近くしているのは誰か」など、行住坐臥の区別なく、「誰」の一字を提起すれば、最も容易に疑念が生じる。難しく考える必要はない。「誰か」という話頭は参禅の実にすぐれた方法である。・・・

・・・

この時期は清浄で限りなく軽やかであるが、もし知恵や集中力（覚照）を少しでも失えばぼんやり（昏）とした状態に陥る。明眼の人が傍らにおれば、修行者がこの状態にあるのを一目で見抜いて、香板で彼を打ち、「ただちに、満天の雲と霧は吹き払われる」。多くの修行者はこのようにして悟れた。

私の意見

これはお節介だと思う。禅的体験を重ねてきた私の経験からすると、お節介をせずに、このままにしてしておけば坐禅の時間が足りた時に「自然に」悟れるのである。

P168 高峰妙祖師は言っている。

「参禅を期日を定めて成功させたいならば、千丈の深さの井戸に落ちて四六時中ひたすらそこから脱出することを考えるようにしなければならない。そのように修行して三日、五日、あるいは七日で悟れないならば、私は大妄語の戒を犯したとして地獄に落ちて舌を抜かれるだろう」

この祖師は切なる大慈悲心から我々が忍耐力を持たないのをこのよう

な誓いを立て、我々が悟りを得ることを保障したのである。

私の意見

私の経験からすれば「坐禅の時間が足りたら、自然に悟れるので」何も日にちを限って追い込むようにして「悟らせる」必要もない。日にちを限る事で師弟ともに大きな負担となる。「気がふれる」原因になりかねないし、「**本来の悟り**」から**離れる事**になる。

P178

以上のすべては末法時代の能力の劣った者に対して説いた方法である。

私の意見

ここに大きな誤りがある。末法時代という考えは常識化していた時代もあろうが、ネット情報によると正法、像法、末法という時代区分の考えは「中国天台宗第二祖の予言」だということです。

いずれにしても「悟る能力が書き込まれたDNA」が1,000年単位で切り替わると考える事はたいへん無理がある。

お釈迦さんの時代も現在も代わることなく「悟れる修行を行えば」悟れるのだと私の経験が教えている。

参禅について和歌山市のある方にお聞きした話

この方の言うには師匠が「君は誰か」と尋ねた。「何の何がし」と名前を答えると。「それは符牒だよ。何者だ」と問い直された。坐禅をして考えた。答えを持っていくと。「ダメ」。また坐禅をして、答えを持っていくと「ダメ」。そのくり返して困り果てた。この方の話はそこまででした。

またある人は困り果てて、自分のふがいなさに命を絶とうかと思いつめて、とりあえず持っていった答えに「そうじゃ」と言ってもらって。感激の余り落涙したと語りました。参禅の決まりで、他の人には言わない事となっているので、答えまでは教えてもらえませんでした。

私の意見

中国で随分昔から色々な事情から期日を定めた坐禅修行が行われてきたようであるが、いかがなものでしょう。その考えや方法がいつの時代か定かでないが、日本に伝わっていたようである。

そのような無理をせず、「脳を変える心」にあるように、修行者が自らの意志で「**日々積み重ねる修行で、本来の悟りの完成**」を待つのでよいので

はないかと思うのです。